

ひなみ塾「国語と数学」

国語とは何か(保存版)

作成：ひなみ塾塾長 黒川裕一

例題：私の言っていることは正しいか？

- (ア) 正しい。
- (イ) 正しくない。
- (ウ) どちらとも言えない。

この例題の正解がすぐに分かる人は、ここから先を読む必要はありません。「国語とは何か」が分かっているからです。

逆に、正解がすぐに分からない人は、ここから先をしっかりと読んでください。身につくまで、何度でも読み返してください。「何を学ぶのか」を知らずに勉強すると、見当違いの方向に行ってしまう。がんばればがんばるほど、目的地からむしろ遠ざかってしまいます。勉強は、量より質です。

国語はなぜ最重要科目なのか？

- 教科科目についていうとき、必ず「国語・算数(数学)・理科・社会」といいます。国語は、いつも一番です。これはなぜでしょうか？
 - 国語が私たちの母国語だからではありません。国語(言葉)こそが、人が人として生きる力の根本だからです。
- 生きるとは何でしょうか。
 - 二つの側面があります。ひとつは、夢、希望、目標などを思い描き、それに向かって努力し、最終的にそれを手に入れるという、「プラスの達成」です。もうひとつは、問題を解決し、自分やまわりの人たちにとってよりよい状況を生み出すという、「マイナスの改善」です。
 - 国語(言葉)は、自分自身や相手との対話を通して、「プラスの達成」や「マイナスの改善」を実現するのに、最も役に立つ道具であり、だからこそ生きる力の根本を担っているといえるのです。

国語とは何を学ぶ教科なのか

- 「国語」は「言葉」の一側面であり、その全てではありません。
 - 「論理的に考えれば分かる側面」以外を問わないのが、国語の最大のルールです。なぜなら、これ以外の側面は主観が多く入るため、客観的評価になじまないからです。
- 従って、「国語の問題を解く」とは、書かれている言葉から論理的に導かれる情報を示すということです。この「情報」には以下のようなものがあり、これらを正確に把握できているかどうか確認するのが国語のテストに他なりません。
 - ◇ 筆者の説の根拠および主張(結論)
 - ◇ 根拠と主張(および段落と段落)の接続関係
 - ◇ 指示語や代名詞の指示内容
 - ◇ 助詞などの含意

- 国語力には、大きく分けて「読解力」と「作文力」がありますが、これらは実は同じコインの裏表にすぎません。
 - これらふたつの正体は、「聞かれたことに、根拠を持って、論理的に答えること」であるというのが本校の考えであり、KKRと呼んでいます。

(K) 聞かれたことに
(K) 根拠を持って
(R) 論理的に答える

- 言い換えると、このようにして答えられないことを、国語では問うてはならないのです。
 - ◇ 国語の問題には、「次の文を読んで、問いに答えなさい」と必ず書いてあります。つまり、答えは全て文の中に書かれているのであり、それは「根拠を持って論理的に」見つけられるのです。そうでない問題は、国語にはなじみません。
 - ◇ 従って、冒頭の問題の答えは、(ア)(イ)(ウ)のいずれでもありません。なぜなら、この問いの答えは、論理的に根拠を持って見つけられないからです。よって、正解は、「これは国語の問題ではない(国語の問題にはなじまない)」となります。
- 国語力においてとりわけ決定的なカギを握るのは「論理力」であり、上記のように、本来、最も時間をかけて学ぶべきものです。しかし、国際的に見ると、日本の国語教育が最も弱いのが、ここなのです。
- 国語は暗記せねばならないことがとても少なく、本質をきちんと理解し、「本物の学力」を身につければ、いわゆる「受験テクニック」や「よく出るパターン」を丸暗記する必要はありません。
- 取り組み方が分かれば、国語は、「生きる力」を向上させるのに役に立ちます。なぜなら、言葉の論理的な側面を学び、身につければ、より迅速正確で生産性の高いコミュニケーションをとることができるようになり、上記の「プラスの達成」や「マイナスの改善」に大いに役立つからです。

本論の構成

- 国語の全体像をつかむための最重要ポイントのみに絞り込んで、本論を以下のように構成します。

I. 前提と主張	IV. 指示語
II. 論理	V. 助詞
III. 接続	

I 前提と主張

1. 主張とは？

- 主張は、常に、「Aである」という形式で表されます。(A=自分[筆者]の言いたいこと)
- より細かく分けると、以下の二つになります。
 - 事実: 「Aである」(例: 日本は歴史のある国である)
 - 価値判断: 「Aすべきである」(例: 日本はもっと国際貢献すべきである)

例題: 以下の主張は、「事実」と「価値判断」のどちらですか？

- (ア) 子どもは外で遊ぶべきだ。
 (イ) 最近の子供は背が高い。
 (ウ) 九州こそ日本の中心だ。
 (エ) 大人になってからも勉強を続けるべきだ。

2. 主張の二大要素とは？

- 主張には、以下の二つの要素があります。
 - WHAT(何を): 「言いたいこと」のことです。
 - HOW(いかに): 「WHATの伝え方」のことです。
- 例えば、「この作文はよくない」ということを伝えたいとします。これが WHAT にあたります。HOW を変えると、以下のようになり異なる言い方になります。WHAT が同じでも HOW が変わると印象が変化します。
 - 「この作文はひどい」
 - 「この作文は平均以下だ」
 - 「この作文はもっとよくなるのに」

例題: 「このハンバーガーはおいしくない」(WHAT)を、HOW を変えて表現してみましょう。(以下の空欄に記入して下さい)

3. 主張の基本パターン

- ただ「最近の子は背が高い」と言っても、「ホントですか」「そんなことありませんよ」と返されるかもしれません。そこで、国語で学ぶような「(他の人がある程度納得してくれるような)しっかりした主張」においては、論理が重視されます。
- 論理とは、「Aという根拠がある。ゆえに、Bと主張(結論)する」というつながりのことで、本校ではこれを「A→B」と記号で表します。
 - 例えば、「①この3日間ずっと雨が降っている。②だから、きっと明日も雨が降るだろう」という主張は、「①→②」と記号化できるわけです。

例題 1: 「①私は一週間、水しか飲んでいない。②だから、死にそうなくらいお腹がすいている」という文を読んで、次の問いに答えましょう。

- (ア) ①②のどちらが根拠でどちらが主張でしょうか。
 (イ) ①②について、これを記号化しましょう。

例題 2: 「①私は死にそうなくらいお腹がすいている。②なぜなら、一週間、水しか飲んでいないからだ」という文を読んで、次の問いに答えましょう。

- (ウ) ①②のどちらが根拠でどちらが主張でしょうか。
 (エ) ①②について、これを記号化しましょう。

4. 前提のパターン

- 前提には、大きく分けて、以下の2つのパターンがあります。
 - 列挙型: 前提がいずれも単独で成り立つもの
 - ◇ ①Jackはよくメールをくれる。②彼は、ときどきご飯もおごってくれる。③Jackはとてもいいヤツだ。
①→③、②→③が、どちらも成り立っていて、①②はバラバラでも問題ありません)
 - 結合型: 前提が組み合わさって初めて前提として成り立つもの
 - ◇ ①Jackがこの本を勧めている。②Jackの勧める本にはいい本が多い。③この本を買おう。
(こちらが、①+②→③という構造になっていることに注意しましょう)

例題: 以下の主張の前提は、列挙型ですか、結合型ですか。

- (ア) ①この町はいいところだ。②ここには海がある。③ここには大きな繁華街もある。
 (イ) ①パソコンは1年ごとにモデルチェンジをする。②このパソコンが出てからもうすぐ1年になる。③このパソコンは買わないでおこう。